

論文の内容の要旨

論文題目 江戸文学における『三国志演義』の受容
—「義」概念及び挿絵の世界を中心に—

氏名：梁蘊嫻

中国の歴史小説『三国志演義』（明・羅貫中）は江戸文学に対して多大な影響を与えている。本論文は、文字テキストの分析と挿絵の分析から、江戸文学における『三国志演義』の受容について論じたものである。

「義を演ずる」という書名のとおり、「義」は『三国志演義』（以下は『演義』と呼ぶ）の大きな主題である。吉永慎二郎氏は、「『三国志演義』における義気について—中国文化のエートスへの一考察—」（『秋田大学総合基礎教育研究紀要』1巻13号、1994年）において、『演義』の「義気」を「中国文化の道徳的特質」としている。ところが、この「義」は日本では必ずしもそのまま理解されていたわけではない。たとえば、後述するように、漢語の「義」が和語の「情」と訳されることが見受けられる。異文化における特有の用語を翻訳する際に、翻訳する側に対してすでに定着した自ら独自の用語を選び、変換させることが多い。異文化の受容とその変容の過程を研究することによって、自己と他者における文化の特質の違いを明らかにすることができる。本論の第一部では、『演義』の「義」の概念を相対化させることによって、日本文化の一特質を浮かび上がらせることに努めた。第二部では、挿絵の問題を取り上げた。日本の三国志物は、挿絵を主体とするジャンルに多く見られる。これらの作品が挿絵を通して『演義』の世界をいかに表現しているのかを分析した。

第一部第一章では、『演義』の「義」を「大義」と「義気」という二つの視点から分析した。「大義」は、主君が無道な行為をした際に、臣下が主従関係を解消できるという「君臣義合」の儒教的主従観を前提としており、孟子の革命論に由来する。「義気」は、自発的な私的正義であり、平等な信頼関係に基づく。劉備らの義兄弟の関係が「義気」の典型であり、それは「同年同月同日に死ぬ」という義兄弟の契りを結んだことに見られる私的結束力である。その「義気」は仲間だけではなく、敵同士にも適用される。主君の命令に反しても、尊敬できる敵には心を許し、「内面の主観的道德」としての「義気」が発動する。本論でもっとも強調したのは、「義」と「忠」の概念の違いである。「大義」と「義気」は、君主の善し悪しに関わらず、臣下が無条件に仕える、という意味での「忠義」と異なっている。また『演義』における「忠義」と「大義」と「義気」の間で、概念は相克はあっても、優先順位が決まっている、という三者の相互関係を明らかにした。

第二章では、『演義』の日本語訳である『通俗三国志』（湖南文山序、元禄 2～5 [1689～1692] 年刊）の翻訳について分析した。第一節では、「大義」を「忠義」として捉え直す傾向に注目し、この傾向が日本では儒教思想を歴史の叙述に利用する伝統がなかったことに起因していると指摘した。第二節では、「義気」が「忠義」「信義」と訳されることに着目した。「内面の主観的な道德」としての「義気」が、『通俗三国志』では、いかに「公的な客観的な道德」に変えられているのか、について論じた。つづく第三節では、漢語の「義」が和語の「情」と訳されていることに注目した。「義」と「情」は、節操のある的に敬服して心を許す、という場面によく使われている。『通俗三国志』が軍記物語から「義」と「情」との共通点を見出し、軍記物語の方に嵌めることによって、日本人に馴染みのある文脈に導入していることを指摘した。一方、「義」と「情」、それぞれがもつ文脈の違いに起因する齟齬についても議論した。以上の三節を通じて、「義」の概念の変容の原因の一つが日本の軍記物語と中国歴史小説の書き方の違いに求められるということを示した。

つづく第三章では、浄瑠璃『諸葛孔明鼎軍談』（竹田出雲作、享保 9 [1724] 年初演）の分析を行った。この作品は、『演義』の「義気」と「大義」を「忠義」として読みかえている。たとえば、『演義』には関羽が「大義」と「義気」を守るために、曹操に降伏するという場面がある。これに対して、『諸葛孔明鼎軍談』の作者は、主君への「忠義」と肉親への愛情を両立させるための葛藤を生み出し、そして身替りという自己犠牲の行動を取るという物語に描き変えている。日本の演劇では、「義理」と「人情」をめぐって葛藤が生じたときに、登場人物の自己犠牲によって問題を解決するという

パターンがよく見られる。『諸葛孔明鼎軍談』は、『演義』に描かれる葛藤をこうした日本人に分かりやすい葛藤へと転換しているのである。本章では、「義」の概念を手掛かりとして、葛藤の構造に着目しながら、『諸葛孔明鼎軍談』のテキストを分析した。

興味深いことに、こうした肉親間の葛藤は、第四章で取り上げた『三国志画伝』（重田貞一作・歌川国安画、天保 1～6 [1830～1835] 年刊）にも見られる。たとえば、『演義』の第五十三回では、敵同士の間羽と黄忠がお互いの心を通い合わせる場面が描かれている。これは主君への「忠義」と好敵手への「義気」との葛藤がテーマとなっている。しかし、『三国志画伝』はここを物語のクライマックスとはせず、この後に、「義理」と「人情」の話を創り出している。つまり、女性が夫と弟の双方に義理を立てるために、弟を殺して自害するという場面である。筆者は、『三国志画伝』がいかに「義気」から生まれた葛藤を利用して、家族をめぐる葛藤を創り出したかを分析した。また、この作品が、『演義』のように、主君の殺される場面を結末としていないのは、「忠義」の精神を重んじる結果であると主張した。ここでは、『三国志画伝』を『諸葛孔明鼎軍談』と合わせて考えることによって、両者の共通点を明確にし、その背景となる日本文化について考察した。

こうして、第一部では日本の三国志物には、『演義』の「義」を、「情」「忠義」「義理と人情の葛藤」に変化させる傾向があることを示した。注意すべきは、この三つの概念がいずれも日本文学によく見られる価値観だということである。日本の三国志物は、『演義』の「義」に、共鳴を覚えているからこそ、「義」の場面を大きく取り上げた。しかし、この共鳴は日本的価値観に根ざす独自の解釈に基づいたものだったのである。

第二部第一章では、『演義』諸本、すなわち周日校本・呉観明本・英雄譜本・宝翰楼本・李笠翁本（以下「五種刊本」と呼ぶ）及び遺香堂本、の挿絵を分析した。第一章第一節では、挿絵の画題と本文とを付き合わせて分析することによって、五種刊本の挿絵が、合戦物語を好んで取り上げていることを指摘した。第二節では、遺香堂本が『演義』の女性の登場人物、伝奇的な場面も挿絵に取り上げ、さらに忠節の思想なども表現しているということを論じた。第三節では、構図の問題を取り上げた。五種刊本の各回の画題は同じであるにもかかわらず、構図においてはそれぞれ特色がある。紙幅の制限上、ここでは後の論証と関わる宝翰楼本だけを取り上げ、構図からその独自性を見出した。

続いて第一章の研究成果をふまえながら、第二章から第四章までは、日本の三国志物の挿絵を検討した。三国志物の挿絵は、ほとんどが(1)『演義』の挿絵を参照して描

かれたもの、(2)日本で刊行された中国関係の書籍を参照して作られたもの、(3)当世化したもの、という三種に分類することができる。

第二章では、絵本読本『絵本三国志』（都賀大陸序・桂宗信画、天明 8 [1788] 年序）の挿絵を考察した。本作は、『演義』の挿絵を参照して描かれたものに当たる。『絵本三国志』の挿絵は、『演義』諸本の特徴を利用し、複数の視点を同作に使い分けることによって、「動」と「静」、「群」と「個」、「剛」と「柔」という対称性を際立たせている。また、挿絵の取舍選択によって、合戦の形態を増やし、また合戦場面を多角的に描くことができた。このように、『絵本三国志』は『演義』の諸本を取り入れながらも、諸本とまったく異なった、独自の作品として成り立っているのである。本作の検証を通じて、模倣という行為のなかの創造性をめぐる問題について論じることができた。

第三章では、合巻『三国志画伝』の挿絵を取り上げた。本作は『絵本三国志』と異なり、『演義』の諸本からの直接的な影響は見られない。第一節では、『三国志画伝』が『絵本三国志』及び日本で刊行された異国関係の書籍を参照することによって創造された中国像を描いていることが明らかになった。第二節では、『三国志画伝』が、合巻の形式を利用することによって、『演義』の世界のイメージを視覚的に具体化し、巨視的な把握と物語の展開の細部にわたる描写の両方を読者に提示することができた、ということを示した。

つづく第四章では、『演義』の日本における当世化という点について検討した。ここでは合巻『世話綴三国志』（墨川亭雪麿作・歌川国貞画、天保 2 [1831] 年）の挿絵を取り上げた。本作は、当時の役者の似顔絵を、その役者の格付けや得意とする役柄に合わせて『演義』の人物にあてはめ、人物の性格や立場を象徴的に表わすものとして使っている。ここでは、『演義』の登場人物が、どの役者と対応しているかを検証し、またそれによって、当時の人々が『演義』の人物をどのように捉えていたかを論じた。そして、『世話綴三国志』がいかに『演義』を当世の事物と結び付けることによって、新たな世界を繰り広げたのかを確認した。

こうして、第二部では、類似の場面を繰返して挿絵として使用する『演義』に対して、日本の三国志物の挿絵は、『演義』を模倣しながら、自国の文化と融合させることによって、挿絵に様々な変化をつけ、『演義』を多面的に表現することができた、という結論を導いた。

以上の論考から、日本に伝来した『演義』は、さまざまなジャンルに適用されることによって、新たな生命を獲得したのである。